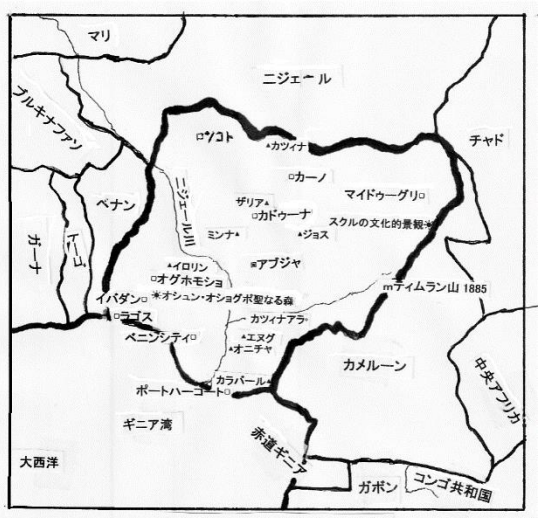
ジョン・エドワード・フィリップス John Edward Philips 教授

へのインタビュー

インタビュアー：板垣雄三信州イスラーム世界勉強会代表



ナイジェリア連邦共和国 地図

（作図：板垣雄三　信州イスラーム世界勉強会代表

アフリカ大陸の国々

（赤線がナイジェリア）

問１：ナイジェリアから日本へお帰りなさい、ジョン・フィリップス先生！「e 定例会」の読者に向けて自己紹介をお願いします。

ありがとうございます。私は弘前大学の名誉教授です。ペンシルベニア州立大学で学部生の時にフォークロア研究とアフリカ研究を学び、歴史学の学士号を取得しました。その後、大学院生として UCLA（カリフォルニア大学ロサンジェルス校）に移りました。そこでアフリカ言語学を学ぶ日本人女性と出会い、結婚しました。そしてフルブライト奨学金を利用し、彼女を連れてナイジェリアのソコト大学（現ウスマン・ダンフォデオ大学ソコト校）へ留学しました。彼女はその後東北大学で修士論文を書き上げ、私はアメリカ史のティーチング・アシスタントとして一年間を過ごした後、論文を書き上げるために来日しました。彼女は秋田大学でキャリアアップしたので、私たちはその後も一緒に暮らしています。

問２：あなたが研究テーマとしてナイジェリアの人々や文化に興味を持ったきっかけは何ですか？

まず私が何によってアフリカの歴史に興味を持つことになったか、述べる必要があるでしょう。私が初めてアフリカの歴史に触れたのは、中世西アフリカにおけるガーナ、マリ、

ソンガイのイスラーム諸帝国について、ブリタニカ国際大百科事典を読んだことです。そこで私は、どうしてそれまでこれらの国々について学ぶことがなかったのか、不思議でした。なぜアフリカは世界史の記述からはじき出されていたのだろう？そのわけを知ることは、それ自体が長い話になります。
どうしてナイジェリアか、について話しましょう。初めてアフリカに行ったとき、私は西アフリカの四ケ国を訪れました。それらの国々にはそれぞれ独特の軍事独裁政権がありましした。その中で唯一ナイジェリアでは、報道の自由と言論の自由があり、選挙によって選ばれた政府に交替しつつありました。加えて、1970 年代中盤、ナイジェリアは石油の富により沸いていました。発展する可能性が明らかにあるように私には思え、よりナイジェリアについて知りたいと思ったのです。そういうわけで、UCLA の修士課程でアフリカ地域研究をするためにハウサ語を選びましたし、博士課程に進んでも、ナイジェリアの歴史と政治を研究するためにナイジェリア人歴史家の指導教授につく選択をしました。

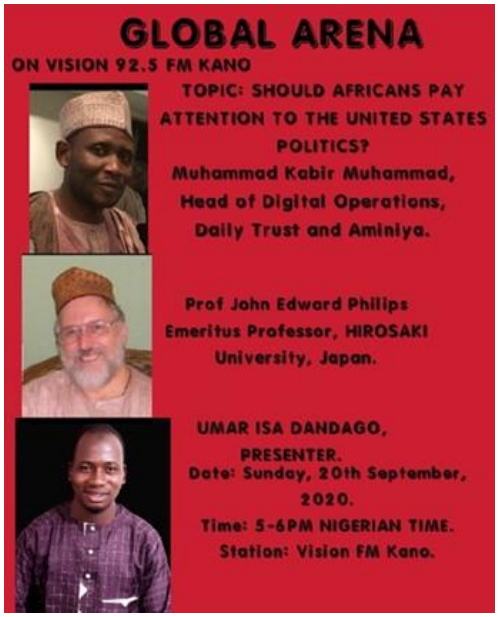
問３：奥様は秋田大学で教えている文化人類学者で、大町のご出身と伺っています。教授も幾度か長野県においでになっていますね。大町市や長野県の印象はいかがでしょうか？
私の妻は大町で育ちましたが、生まれは宮崎です。彼女の家族は彼女が 2 歳の時に大町に引っ越しました。私は自然が好きなので、日本に来て、東京から彼女のご両親に会いにいったとき、彼女が東京や大阪といった場所でなくこういう場所で育ったことがうれしいと彼女に言いました。私は人混みや騒音を離れ、木々の中で一人静かに過ごす方が好きです。また妻は文化人類学者ではなく、言語学者であることも申し添えておいた方が良いでしょう。

問４：日本の東北地方でアフリカ史を研究したり教えたりすることに特別メリットがあると感じたことがありますか？

じつは、あまりありません。東北地方でアフリカ研究の会合はありますし、ほかのアフリカ研究者の方々との時間は楽しいものですが、日本には地域研究のインフラが必要に応えられるだけ揃っていません。私は地域研究という言葉が“地域研究”から“地方研究”に変化していくのを見てきました。まるである種の国際研究が国内研究あるいは国学に変わってしまうようなことです。冷戦の終了とともに米国では地域研究が流行りましたが、9/11 事件後はイスラーム地域研究が拡がらなくなってしまったことには驚きました。また、それが拡がった日本でも、途中で拡大が止まってしまったのには失望しています。

問 5:最近のナイジェリア訪問でのご計画はどのようなものでしたか?また新型コロナ・ウイルス感染症の影響下で目的を果たすことはできましたか？この感染拡大の環境下で秋田に戻って来るのは難事業だったと思いますが、どのようなことがあったか教えていただけますか？

私は定年退職後まもなく、ボコ・ハラムの調査をするためナイジェリアに行きました。それをするために招いてくれていたのはマイドゥーグリ大学トランス・サハラ研究センター前所長のアブーバカル・ガルバさんで、彼は弘前大学での私の最終講義に来てくれたのでした。私は現地でたくさんの情報と深い理解とを手に入れました。それに加えて、カーノとアダマワでボコ・ハラムの動向に関する二つの会議に出席しました。それからそこで集めたものを基に論文を書き上げるため、日本に戻ってきました。毎年開催されるアメリカ研究協会のため、ハワイに短時間立ち寄りました。そこでアフリカにおけるアメリカ研究について講演しました。その後ちょっと日本に寄って、ナイジェリアに戻りました。マイドゥーグリの大学で私の研究について発表し、別のボコ・ハラムに関する会議に参加する予定でした。私は、アブジャ大学で植民地時代の言語政策についての招待講演をおこない、テレビ放映もされました。しかしパンデミックが発生し、国内線・国際線のすべてのフライトがキャンセルされ、国内に足止めされることになりました。私はマイドゥーグリに戻ることさえできなくなってしまったのです。その後の数か月は、安全を確保すること、また日本に戻ることのために、費やしました。アメリカへの避難便がありましたが、私はそれに乗りませんでした。ご存じの通り今の状況を鑑みると乗らずにいて正解でした。ついに、フランスへの避難便を見つけ出し、パリでは同じターミナルで成田行きに乗り継ぐことができたので、フランスの税関検査や入国審査を受けずに済みました。私の妻が成田まで迎えに来てくれ、検査を受け 14 日間の隔離を経験しました。今はワクチン接種が始まるのを待っているところで、黄熱病の予防接種を受けなおし、ビザを取得しなければなりません。ナイジェリアに戻るまでに長くかからないように希望しています。それまでの間は執筆活動をしながら、経済的な問題を何とかしようと思っています。退職後の生活がこんなに忙しくなるとは思いませんでした。



問 6:ナイジェリアないし広く西アフリカにおけるイスラームの遺産と現状とを理解する目的でカドゥーナに滞在することの意義について、分かり易い具体的な事例やアイディアを

教えていただけますか？もし私たちが複眼的にナイジェリア連邦共和国の社会を観察する場合、その文化的・民族的・社会的・歴史的な構造に対してどのようにアプローチすべきでしょうか？現代ナイジェリアの政治の動きの中でカドゥーナの街が占めている位置はどんなものでしょうか？

一つの質問の中に多くの問題がありますね。カドゥーナは昔の北ナイジェリア地域の旧首都でした。北部地域における旧首相官邸は、首相の死後アレワ歴史研究・資料センターになりました。センターは北部地域のイスラームに関係したものだけでなく、地域の少数キリスト教信者に関する膨大な量の文書やその他の資料も蔵しています。私はそこにしばしば滞在し、研究のためにそのコレクションを利用しています。また私は大英図書館の貴重資料アーカイブ・プログラムから支援金を頂き、センターの所有する最初のハウサ語の新聞「*Gaskiya ta fi Kwabo*」の保存とデジタル化をしています。センターはボコ・ハラムの脅威にしばしばさらされるマイドゥーグリより安全で良い調査拠点です。カドゥーナはナイジェリアの“中間帯”に存在しています。ここは重要な地域です。軍人のほとんどが伝統的にこの地域から徴集され、とても多様な民族が存在し、国政選挙においてしばしば重要な地域となります。現在の知事ナスィール エル・ルファイは野心家であり、2023 年の次の大統領選挙では注目すべき人物となるでしょう。南カドゥーナ地域はキリスト教信者が大半を占めており、政権の行く末を決めるような地区なのです。そのために、その規模に比べて大きな影響力を持っている、不安定な国の不安定な地区なのです。**“Domestic Aliens: the Zangon Kataf Crisis and the African Concept of Stranger”** in ***Être étranger et migrant en Afrique au XXème siècle*** v. 1 pp. 375-401 (edited by Catherine Coquery-Vidrovitch, Odile Goerg, Issiaka Mandé, and Faranirina Rajaonah) (Paris, 2003)の中の私の分担した章を見てください。
私の章はナイジェリアで最近再出版されました。ナイジェリアにおけるイスラームの伝統の中心は 11 世紀のボルヌに始まりました。その場所の現在の首都はマイドゥーグリです。しかし中心はその後、ウスマン・ダンフォディオが起こしたジハードとソコトのカリフ国の創設とにより、ソコトに移りました。
ナイジェリア「連邦」の構成は常に論争の的となっています。英国統治の後、情勢は不安定となり、単一民族によって統治されていた 3 つの地域の同盟は失われました。最初の軍事政権により統一国家がつくられましたが、瓦解してしまいました。次の軍事政権によって 12 の州による連邦政府が樹立され、中央に権力が集まりました。これはビアフラ戦争の原因になりました。その東部地域は石油資源があるため連邦から脱退を図ったからです。その後続いた軍事政権は 36 州に国を分割し、さらに権力を中央政府に集めました。ナイジェリアの政治はとても面白いトピックです。ナイジェリアを別の観点から調べようとする多くの人が、仕事に着手した途端、ナイジェリアの政治についても勉強をしたいという気持にドンドン引きこまれるようになるのです。

問 7:ナイジェリア社会においてボコ・ハラムの起源、社会基盤、実際の影響について教え

ていただけますか？西アフリカのイスラーム主義者の諸グループやムスリム世界全体とのつながりでは、どんなことに気づかれましたか？ナイジェリアに滞在している間、欧米人に対して何らかの脅威の兆候がありましたか？ボコ・ハラムとは逆の方向で注目すべき傾向も指摘できるようでしたら、ナイジェリアにおけるムスリムのそのようなポジティブな活動の情報についても、ヒントを与えていただけますか？

またまた、一つの質問の中に複数の疑問が含まれていますね。academia.edu から手に入る Boko Haram: Context, Ideology and Actors を読んでみてください。ページのリンクもあります。Boko Haram: Context, Ideology and Actors
ボコ・ハラムの系統を考えると、ほとんどのムスリムは、ムスリム戦士（ジハーディーたち）は狂っていると考えています。少なくとも 9/11 以前ほとんどのムスリム戦士たちはアル=カーイダが狂っていると考えていました。ISIS（イスラーム国）はアル=カーイダから狂っていると考えられてアル=カーイダから追い出された人々です。ボコ・ハラムは ISIS に加入しましたが、少女たちを（他の目的とともに、とりわけ）自爆テロ目的に使おうとしたため、ISIS から狂っていると考えられて追い出された人々です。これによって主要な派閥は ISIS に戻り、彼らから指令を受けることを認めた者たちもいます。現在ナイジェリアでテロ活動をしているボコ・ハラムのグループは二つ存在します。欧米人に対する脅威について目撃することは、それ程はありませんでした。農村ではフラニ牧畜民による全般的な無法状態があります。しかし、都市では少しは安全なように私は感じました。マイドゥーグリでは夜間、銃撃音や町の端から飛来するヘリコプターの爆音が聞こえます。その音を聞いて私は米国のゲットーに住んでいた時の警察ヘリの騒音やギャングの銃撃音を思い出しました。キャンパス内では、紛争衝突の響きは聞こえますが、比較的安全な感覚が居られました。

問 8:ナイジェリアに滞在している最中に新型コロナ・ウイルス感染症に直面されたわけですが、蔓延抑止をマネージする上でアフリカの何か特徴的な方法に気づかれることはありましたか？ナイジェリアから米国の状況をどうご覧になりましたか？

国内便、国際便、鉄道を含む州の間の移動が完全にできなくなったため、私は当初ナイジェリアに留まることになりました。完全なロックダウンがあったため、経済は傷つき、貧困層の人々はひどく苦しみました。救援物資が配布されましたが、滞在していた場所に調理するための設備がなく、食事のために出前を頼まなければなりませんでした。マスクは日用品になりました。これはパンデミックに対する対応が、異なる州によって、異なる対応になるということです。ウイルスは海外からナイジェリアに入ってきたため、主要都市で国際空港のあるラゴスとアブジャが最も深刻な状況です。加えてカーノにおいて感染爆発が発生していました。これは死亡者急増のため、おこなわれた検査によって判明しました。私が滞在していたカドゥーナでは、知事がアブジャでの会議に出張したので、アブジ

ャで見た状況が州の指針となりました。彼は厳しい措置を取りました。市場、モスクや教会も閉め、ウイルスを封じ込めることができました。アレワ・ハウスがもつ結婚式場やその他の機能がキャンセルになってしまったため、いくつかの場所で食事を注文することはできたとは言え、食事をとることが簡単ではなくなりました。しかしながら、事態は手に負えなくなるかもしれません。アフリカではかつて経験した程には感染の拡がりが現在のところは未だ厳しくない理由が分かっている人は何処にもいないと思います。まして、今後これ以上流行が厳しくなるかどうか分かっている人もいるとは思えません。先ほども言ったように、私は米国に避難する気持はありませんでした。もしも日本に戻ってくることができなかった場合、私はナイジェリアにとどまっていたでしょう。UCLA の私の親しい友人はすでに米国で亡くなっています。今、米国はとても不安な状況にあります。

問9:ナイジェリアの一般の人々は、米国におけるBLM（黒人の命も大事だ）運動のニュースをどのように聴いているでしょうか？ナイジェリア社会で BLM に対する何らかの反響・反応を観察する機会がありましたか？

私は BLM 運動が起きてからはナイジェリアにいませんでした。しかしナイジェリアにおいて同じように警察の暴力に対して批判する活動“End SARS”があります。また5年前の大統領選では大きな話題となった州警察の問題もありますが、昨年の大統領選挙では忘れられてしまったようです。ナイジェリアでは州警察、地方警察のどちらも存在しません。連邦警察のみです。州の連邦によって国が成り立っているにもかかわらずです。もちろん米国には連邦警察は存在しません。州と地方警察のみです。FBI、ATF、ICE 等の専門の連邦法執行機関は存在しますが。日本は、ご存じの通り連邦制ではありません。しかし国家警察に一本化されてはおらず、都道府県ごとに分かれた警察機関が存在します。ナイジェリアにおいて州警察の問題はボコ・ハラムとの闘いというコンテクストのなかで重要です。

10: 一般にナイジェリアの市井の人たちは、サハラ以南のアフリカで最大の石油輸出国の市民として、脱炭素を目指す世界の未来をどのように見ているでしょうか？彼らは世界の環境政策のトレンドに対して準備ができていますか？

私はナイジェリアの人々がポスト化石燃料世界に対して何の準備もできていないことを恐れています。ナイジェリアの人々のほとんどは現在が脱炭素化への過渡期だということに気がついていません。それどころか、彼らの石油がいずれ枯渇してしまうということすら分かっていないのです。たしかに最近は、そんなナイジェリアでもソーラーパネルが現れ始めてはいます。しかしナイジェリアでは、長い間、補助金で国内の石油価格を安く抑えるよう要求する闘いが続いてきました。これはディーゼル発電機や電気温水器の暮らしなど止める動機づけがほとんどないことを意味します。あるナイジェリア人が私に「長い目

で見れば太陽光発電で湯を沸かすコストは安いだろうが、初期費用がべらぼうだ」と言っていたことも思い出します。ナイジェリアの人々は長期をにらむ投資を考えることに慣れてはいない。だからナイジェリアの人に太陽光発電の装置を売るのは難しいのです。私が好んで彼らに言って聞かすのは、日本では水があり過ぎるのでその処分が大変だという話です。おそらく、日本の方々に対する私の説明は、アフリカでは太陽光エネルギーがあり余っているので、太陽光エネルギーから脱け出すことが問題で、太陽光の恵みを収穫したり利用したりする仕方など考えては来なかったのだ、という語り方にすべきでしょう。

問 11:先生が日本からきた米国人の学者だということにナイジェリアの人が気づいたとき、彼らの態度はどのようなものでしたか？一般のナイジェリア人の間で日本に対するイメージはどのようなものだとお考えですか？

さまざまですね。ナイジェリアや一般にアフリカにおいて、日本に対する十分な知識はありません。日本がヨーロッパにあると考えている人もいます。ヨーロッパ人がアフリカの人々に言って聞かせてきたのは、自動車や電気製品が作れるのはヨーロッパ人だけだということです。そのため、日本からきた製品を見たとき、彼らは日本がヨーロッパにあるに違いないと思い込むのです。中国製品が普及するにつれ、この状況は変わりつつあります。数年前ある人は、中国製品は安いが粗悪、日本製品は値段は高いが高品質だ、と言っていました。武道に興味がある人もいますし、漫画やアニメに興味があると言う人にも会ったことがあります。しかしナイジェリアにおける日本文化の影響は、私がカリフォルニアで受けたそれとは比べようもなく小さいと思います。他方、日本で学び、日本語を流暢に喋るナイジェリアの方もいます。日本に対する研究はナイジェリアでもっとあるべきだと私は思いますが、日本のことに詳しい人々もいますし、日本についての専門家と言える人々さえ存在します。

問 12：イスラーム世界の中で重要な一角を占めるナイジェリアでの、あなたのフィールドワークにおいて、日本人が興味を抱きそうなエピソードや話題で思いつかれるものを、エッセンスで結構ですから、紹介していただけませんか？

オーワウ！たくさんあります！そのことについては考えがさまざまあり、今後取りかかる予定の本の中で書くべきでしょう。そして出版した暁にぜひとも買っていただきましょう。私は今ボコ・ハラム現象を、歴史的な視野で、特に中世の時代のチャド湖盆地とそこに台頭したボルヌ・カリフ国でのその現象といった側面から、とらえようとしています。私は少し前にその問題に触れた論文を書き、それはレズラズィ・アルモスタファがモロッコで出版しました（問 7 への答えで挙げた URL を参照してください)。レズラズィは日本語でも出版する予定と言っていたので、妻にその論文を日本語に翻訳してもらいましたが、これまで何の音沙汰もありません。

私は殊にカーノの中央モスクへのボコ・ハラムの爆破攻撃に個人的な関心を抱いています。そのモスクのイマームがバイェロ大学カーノ校の学究だった時のことを知っているからです。彼は私が深く付き合ってきた親友です。私は幾度も彼の居室でラマダーン月の日没後の食事を共に摂りました。人々はイスラーム教テロリストらが非ムスリムよりむしろもっと多くのムスリムを殺していると言いますが、それはプロパガンダではなく、統計的事実なのです。それでも、彼がまだ生きていると語れることは、私の喜びです。

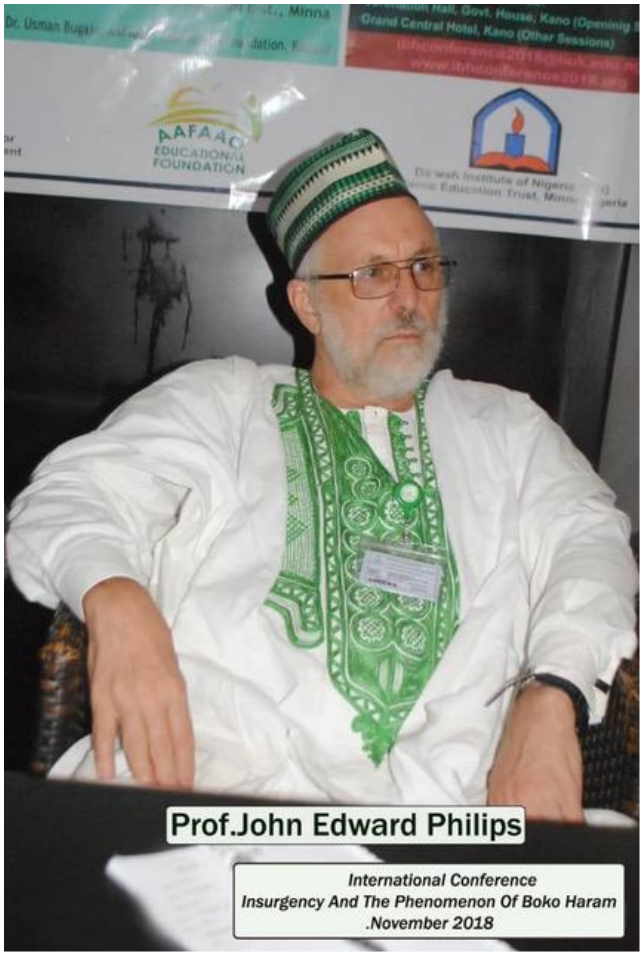
ところでもしかしたら私が ***Handbook of Islamic Manuscripts: Nigeria, Section 1: the Nigerian National Archives,* (volume 1)** Prepared by Baba Yunus Muhammad. Edited and annotated by John Hunwick. (London, Al Furqan Islamic Heritage Foundation, 1995). in ***The British Journal of Middle Eastern Studies*** v. 23 no. 2 (1996) pp. 243-245 について書いたレビュー論文に興味があるかもしれません。またアフリカにおける日本研究についてもいくつかの論文を持っているので、ご興味があれば共有することができます。

監訳：板垣雄三信州イスラーム世界勉強会代表
訳：東京大学総合文化研究科　渡辺玄哉

ナイジェリア点描

（写真は文中の写真を含めフィリップス教授撮影）

ナイジェリアでの生活


Prof.John Edward Philips
International Conference
Insurgency And The Phenomenon Of Boko Haram
.November 2018

Indomie
CHICKEN FLAVOR
Goût Poulet
Instant Noodles
Tasty Nutrition. Good For You.
SUPER PACK
CONTENTS 40 PACKS